

## 平成26年度 鳥取県東部沿岸土砂管理連絡調整会議 議事概要

日 時：平成26年10月30日（木）午前10時から正午  
場 所：鳥取大学工学部大学院棟 地域安全工学センター  
参加者：別添名簿のとおり

### 1 開会挨拶

（事務局）

- ・より効率的・効果的にサンドリサイクルを実施したいと考えており、今回前浜の目安の検討を行っている。
- ・個別の海岸単位には課題はあると考えるが、新たな展開に向けた動きをしていきたいと思う。

### ■平成25年度協議会意見に対する対応状況

（事務局）

※資料により説明

### 2 議事

（松原教授）

- ・この場所は、地域の安全を工学的に研究する場所であり、そういう意味で海岸の防災にも関わるこの会議にふさわしいと思う。活発な議論をお願いしたい。

#### （1）目安とする浜幅について

（事務局）

※資料に沿って説明

- ・これまではH12年の汀線を基準に評価してきた。
- ・今回は砂浜を防護施設として捉え、防護、利用、環境の観点から浜幅の目安を検討した。
- ・防護の観点では、県内の海岸横断データを収集し、最も危険側（最小断面）で標準横断を設定し、県の計画堤防高T.P4.5mを基準に、越波しない浜幅を検討した。
- ・検討の結果25mの浜幅が必要となる。
- ・利用については、国のアンケート調査結果を参考にして、40mを目安として設定した。これはあくまで海水浴利用に係るデータであり、実際には地引網やその他利用も考えられることから、各海岸の特性に応じて設定していただきたいと思う。
- ・40mの背景には駐車場、トイレへの移動の容易性があるようだ。
- ・環境面については定量的な評価が困難であることから、海岸の環境特性を把握した上でサンドリサイクル実施時に配慮することを目標として設定している。
- ・資料に注意書きをしているが今回の検討はあくまで鳥取県内の標準的な断面を想定して設定したものであり、25mを割り込んだからといってすぐにハード対策といった判断にならないようにしていただきたい。
- ・現況に比べてどうかということではなく、目標の浜幅に対するサンドリサイクルを実施したいという思いである。

（松原教授）

- ・今回事務局から目安ということで提案があった。環境面では、東部においては特別保護区もあり難しい部分でありその都度考えないといけないと思う。

（砂丘事務所）

- ・各浜（場所）によって状況が異なるので個別具体的に基準を明示した方が良いのではないかと。
- ・砂丘の汀線は、いたりきたりである。環境面についても、動物は実際（自ら）移動するし影響は少ないと思う。

- ・また、浜幅が増えると漂着ゴミも増えるということもあるので、配慮が必要と考える。

(事務局)

- ・各海岸管理者で目安にしていきたいという思い。
- ・環境についても、目安を設定することで意識していただければと思う。

(環境省)

- ・環境面について、どのような生息環境があるのかサンドリサイクル実施時に調査はするのか。

(鳥取県土維持管理課)

- ・養浜は毎年ほぼ同じ場所に行っている。施工時期はどうしても（風浪の少ない）春先から出水期をめぐらして行うことになり、生物の活動時期と重なる。
- ・現時点で今後どのような配慮ができるかははっきり言えないが、現状では施工前に調査をしているということはない。

(黒岩教授)

- ・スナガニ等は汀線付近に生息しており、養浜時に荒らさないようにする等の配慮は可能だと思う。

(事務局)

- ・現状の海岸環境を壊したくない。そういう意味で生息分布等の情報があればいただきたい。

(環境省)

- ・当方でも把握はしていない。検討時に情報をいただければと思う。

(県水産課)

- ・水産業（産業）の面からだが、海洋の堆積量は把握できるのか。岩牡蠣の放流や漁礁を設置しておりそういった検討をされているのか。

(事務局)

- ・状況の把握はできると考える。
- ・ポケットビーチであれば、極端に海洋の堆積量が増えることは少ないと思う。
- ・一方で、長い砂浜だとこのようなことは一概に言えず、難しい問題である。

(松原教授)

- ・漁礁等は（海底が）砂浜である場所に設置すると埋没することもある。
- ・よく漁業関係者から相談を受けるが岩礁域に設置した方が良いとアドバイスしている。

(黒岩教授)

- ・今回は基準点のとり方について、今回は1つの考え方を事務局が示した。
- ・次のステップとして基準をどこにとるか利用をとるのか防護をとるのか考えていくことが必要になる。

## (2) サンドリサイクル事業の効果検証及び課題抽出

(事務局)

※資料に沿って説明

(松原教授)

- ・浦富海岸については。

(鳥取県土河川砂防課)

- ・人工リーフの間で局所洗掘を受けており、現状を分析しているところである。

(砂丘事務所)

- ・洗掘部に根固めをするという方法もあるのでは。

(鳥取県土河川砂防課)

- ・いろいろな方法が考えられると思うがまずは原因を分析してから対応したい。

(黒岩教授)

- ・この局所洗掘は西側人工リーフの開口部に着手した H19 年から始まった。開口部の流れが速くなったことに起因するものと考えられる。

- ・根固めで塞いでしまうという方法もあるが、その影響によって今度は田後港への漂砂量が多くなる可能性がある。
- ・A3資料のP5,6にあるように田後港の浚渫量は従来から変わっていない状況であり、慎重に検討する必要がある。

(松原教授)

- ・局所洗掘はT.P-16mということで円錐状に広がっており、埋めるということになるととてつもないボリュームになる。

(岩美町)

- ・浦富海岸は地元関係者の中でも水産（堆砂が困る）と観光（浜が無いのは困る）の両面があり、非常に難しい場所である。
- ・慎重に検討されているということであったが、ぜひとも対策をお願いしたいと考える。
- ・先般海岸マラソンが開催されたが、浜崖があったためにコースの変更を余儀なくされた。このような現状もご認識いただければと思う。

### (3) 今後の取組（各施設管理者との意見交換）

#### ■千代川における自然の営力を生かした土砂管理の試行について

(鳥取河川国道事務所)

※資料に沿って説明

- ・砂州に切り欠きを入れて、自然営力を利用した土砂移動の取組みを行っている。
- ・今年度は大きな出水がなかったために移動は起こっていないが、今後は中小洪水でも移動が生じるよう工夫を重ねていきたい。
- ・河床掘削堆土砂から砂層が確認されたため、秋里に置砂したところ、H25.9の出水で上手く流出させることができた。
- ・今後もこのような取組みにより海への供給を図っていきたいと考える。

(鳥取港湾事務所)

- ・地元調整とはどういうことか？

(鳥取河川国道事務所)

- ・河床掘削土砂を直接海岸に持っていくと、どうしても粒径が大きいものになることから、海岸利用の面も踏まえた調整ということ。

(松原教授)

- ・浜崖の回復には相当な時間を要することから、上記のような取組みは有効であるが、各海岸の利用状況等も踏まえよく検討すべき事項である。

(砂丘事務所)

- ・このような場合は系外という扱いになるのか。

(事務局)

- ・系外という扱いではないが、地元調整は必要であると認識している。

#### ■長和瀬漁港における堆積土砂の養浜利用について

(鳥取市)

- ・長和瀬漁港では西側に土砂が堆積しており飛砂が問題になっている。サンドリサイクルへの活用を関係者に検討していただきたい。

(事務局)

- ・利用できるものは活用したい。

(松原教授)

- ・過去の航空写真等からどのくらいのスピードでたまったのかを把握すれば、沖からきたものなのか、

沿岸漂砂によるものなのか分かる。

- ・沖からきたものであることが明らかであれば利用は可能であると考ええる。

(事務局)

- ・個別に調整したいと考える。

### 3 その他

#### ■簡易な移動装置によるサンドバイパス試験工事の取り組みについて

(事務局)

- ・試験工事の実施目的と今年度試験工事の概要を説明。
- ・実用化を目指し、今年度2回の検討委員会（1回目平成26年10月31日開催）が開催される予定であり、詳細は当該委員会で報告される見込み。

(松原教授)

- ・実用化がみえてきたところであると認識している。